

シンポジウム形式による学習法の導入 I — 教育計画の概要とその評価 —

下田 健治¹, 車 圭子²

Introduction of Symposium-Style Learning I — An Educational Program and its Evaluation —

Kenji SHIMODA¹ and Keiko KURUMA²

キーワード：シンポジウム形式, 自己学習, 授業評価, 動機づけ, アンケート

概 要

自己学習意欲を高める方法として医動物学教育にシンポジウム形式の学習法を導入した。そして、その教育方法や内容を検討するため学生による授業評価アンケートを行った。興味を持たせるための企画としてビデオ視聴、標本供覧、書籍貸出、講演などを行ったところ約90%の学生が医動物学は必要（重要）であると回答した。学生はシンポジウムのための抄録作製や発表などの能動的学習にかなり充実感を持たたようである。今回の教育を受けた学生は臨床検査技師にとって医動物学が学ぶ価値のある教科と認識し、意欲的な学習行動を起こしていることからシンポジウム形式の学習法は、有用な教育方法であることを確信した。

1. はじめに

大学における教育は種々の方法でなされているが、今も昔もその主流は教室における講義法であろう。いわゆる劇場型といわれる一方向性の高い伝統的な方法には多くの利点もみられるが、自らが生涯にわたって学ぶ姿勢を習慣づけるにはこれだけで十分とはいえない。多様化する学生の資質や意欲に大学はどう対応するのか。様々な背景を持った学生が受講している現実を思えば単一の方法で教育効果が上がるとは考えにくい。教育担当者は学生に何らかの刺激を与え、目覚めさせ、学習行動を起こすきっかけを、どのように作れるかが問われている。

今回、臨床検査科1年生を対象として、専門教科に興味を持たせ、提示された課題に主体的に取り組みせることで学習意欲を喚起し、学生の自己教育力を引き出すことを試みた。第一報ではシンポジウム形式の学

習法の概要とその評価、第二報ではシンポジウムの実際とその評価について報告する。

2. 教育計画の概要

1) 対象, 教員および会場について

①対象：臨床検査科1年生74名 ②教員：2名（専任教員1, 非常勤講師1） ③会場 1) 学習の動機づけ：実習室 2) 寄生虫シンポジウム抄録作製：教室, 実習室, 図書館, コンピュータ実習室など 3) 寄生虫シンポジウム：大講義室 4) 寄生虫学実習：実習室

④教育回数（1コマ 90分）：学習の動機づけ4回（1回2コマ）、シンポジウム抄録作製4回（各2コマ）、寄生虫シンポジウム2回（各2コマ）、実習2回（各2コマ）の計10回（24コマ）。授業計画は表1に示した。

2) 医動物学に興味を持たせる試み(学習の動機づけ)

①南米の住血吸虫症のビデオ視聴(31分)②熱帯アフリカでの寄生虫調査に関する講演(約30分, 専任教員)③寄生虫標本供覧(表2)④寄生虫関連書籍の紹介と貸出(表3)⑤テキストの紹介と解説：よくわかる図解医動物学（下田健治著 金芳堂 京都 1999）

(平成12年9月7日受理)

¹川崎医療短期大学 臨床検査科, ²財団法人 岡山県健康づくり財団 保健部 臨床検査課

¹Department of Medical Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

²Medical Technology Section, Department of Health, Okayama Health Foundation

表1 授業計画

回	月日	教育内容	回	月日	教育内容
I	12.4	1) 寄生虫シンポジウム説明：意義，課題，グループ編成 2) 熱帯アフリカの寄生虫感染の現状 専任教員による講義 3) ビデオ鑑賞：「水中の脅威」 (南米における日本住血吸虫症の現状と生活史) 4) レポート：ビデオの感想	VI	1.27	1) シンポジウム抄録の配布 2) シンポジウム当日の説明：会場，持参するもの，教員のコメントや質問など 3) レポート：回虫の生活史と形態
II	12.1	1) レポート提出期限の説明 2) レポート：単包条虫の生活史と形態 3) シンポジウムの抄録作成	VII	2.5	寄生虫シンポジウム① 1) シンポジウム評価表の配布と説明 2) シンポジウム評価表の提出
III	1.8	1) 寄生虫関連書籍目録の配布 2) ビデオ鑑賞：鉤虫 3) レポート：鉤虫の生活史と形態 4) シンポジウムの抄録作成	VIII	2.9	寄生虫シンポジウム② 1) シンポジウム評価表の配布と説明 2) シンポジウム評価表の提出
IV	1.15	1) 寄生虫標本の一覧の配布 2) 寄生虫標本の供覧の意義についての説明 3) 寄生虫標本供覧 4) レポート：肝吸虫の生活史と形態 5) シンポジウム抄録の提出期限についての説明 6) シンポジウム抄録作成	IX	2.12	1) 寄生虫学実習①の説明 2) 検査法：生鮮標本，セロファン厚層塗抹標本，飽和食塩浮遊法，ホルマリン・エーテル法，ろ紙培養法 3) レポート：検査法について
V	1.22	1) シンポジウム質問表の配布 2) シンポジウム質問表の説明 3) シンポジウム抄録提出 4) レポート：日本住血吸虫の生活史と形態	X	2.12	1) 寄生虫学実習②の説明 2) 虫卵の鏡検とスケッチ：広節裂頭条虫卵，小形条虫卵，無鉤条虫卵，縮小条虫卵，ウェステルマン肺吸虫卵，肝吸虫卵，横川吸虫卵，肝蛭卵 日本住血吸虫卵，回虫卵，鞭虫卵，鉤虫卵 3) レポート：虫卵のスケッチ

表2 寄生虫標本一覧

蠕虫類	成虫と虫卵	線虫類	回虫，蟯虫，ズビニ鉤虫，アメリカ鉤虫，鞭虫，東洋毛様線虫，イヌ糸状虫
		条虫類	無鉤条虫，有鉤条虫，広節裂頭条虫，縮小条虫
		吸虫類	肝吸虫，肝蛭，日本住血吸虫（ミヤリイガイ）
	幼虫	アニサキス	
原虫類	マラリア原虫，赤痢アメーバ，トキソプラズマ，ランブル鞭毛虫		
衛生動物	タカサゴキララマダニ，フタトゲチマダニ，ヒゼンダニ，アタマジラミ，コロモジラミ，ケジラミ		

3) 自己教育力に関する試み（寄生虫シンポジウムの導入）

自己学習を進め、興味と理解力を高めるため寄生虫シンポジウムを企画・開催した。課題は、現在の寄生虫感染症の大きな流れをテーマ（表4）としたもので、学生自身が調査、研究し、学習したものをシンポジウムで発表するようにした。

4) 臨床検査技能習得のための試み

体験することで自己学習を充実したものにできるよ

う以下の項目について実習した。

①寄生虫検査法：生鮮標本検査法，セロファン厚層塗抹法，飽和食塩浮遊法，MGL法，糞便ろ紙培養法 ②虫卵の鏡検とスケッチ

5) 出席の確認と重点学習レポート

今回の教育方法は、学生の自由度が高いことが特徴の1つである。そこで出席を確認する意味も含めて授業時間の最初に指定のレポート用紙（課題名を印刷済み）を手渡し、その時間の最後に提出を義務づけた。レポートの課題は①住血吸虫症のビデオの概要と感想 ②鉤虫の生活史と形態 ③単包条虫の生活史と形態 ④肝吸虫の生活史と形態 ⑤日本住血吸虫の生活史と形態 ⑥回虫の生活史と形態などである。

6) 評価について

最初の授業時間に評価方法と配点について説明し、疑問点や質問に答えることで学習への不安の解消に努めた。評価点配分はレポート（6回）：20点，寄生虫シンポジウムの出席，発表，抄録，態度の総合評価：80点，期末筆記試験：100点，合計200満点とし，120点以

表3 寄生虫関連書籍一覧

	書名	出版社名		書名	出版社名
1	おはよう寄生虫さん	講談社の文庫	18	獅子身中のサナダ虫	講談社
2	海外のあぶない病気	コスモの本	19	死の貝	文藝春秋
3	体にいい寄生虫	ワニブックス	20	清潔はビョーキだ	朝日新聞社
4	寄生虫があなたをねらっている	主婦の友社	21	世界史の中のマラリア	藤原書房
5	寄生虫学コンパクト講義	南山堂	22	世界の寄病・感染症マップ	経済界
6	寄生虫学はおもしろい	羊土社	23	空飛ぶ寄生虫	講談社
7	寄生虫が笑う危ない話	青春出版社	24	ダニと病気の話	技報堂出版
8	寄生虫館物語	ネスコ文藝春秋	25	ダニにまつわる話	筑摩書房
9	寄生虫の世界	NHK ブックス	26	ヒトとイヌと寄生虫の愉快な関係	成美堂出版
10	寄生虫博士トイレを語る	TOTO 出版	27	フィラリア	TBS プリタニカ
11	嫌われものほど美しい	草思社	28	不思議な寄生虫	日本実業出版社
12	原始人健康学	新潮社	29	ボンボン・マルコスのイヌ	ルック
13	恋する寄生虫	講談社	30	マラリア vs 人間	晶文社
14	ゴキブリ大全	青土社	31	蟲実話	アスペクト
15	昆虫による病原体伝播のしくみ	南山堂	32	虫の味	八坂書房
16	殺人病ファイル	日経 BP 出版センター	33	笑うカイチュウ	講談社
17	サナダから愛をこめて	現代書林	34	はじめてのアフリカ	自費出版 (下田)

表4 寄生虫シンポジウム課題

	課題名
①	日本および世界の寄生虫感染の蔓延状況
②	海外から持ち込まれる寄生虫
③	通常の食品から感染する寄生虫
④	ゲテモノ食いによる寄生虫
⑤	ペットから感染する寄生虫
⑥	性感染する寄生虫
⑦	日和見感染する寄生虫
⑧	寄生虫感染症の臨床検査
⑨	衛生動物による感染症
⑩	新興再興寄生虫感染症

上を認定とした。寄生虫シンポジウム終了後、自己学習やシンポジウム発表、動機づけなどについて記名による授業評価アンケート(表5)を行った。学生には記名は責任ある意見の証明であり、アンケートの内容は成績の判定には無関係であることを事前に説明した。

3. 結果と考察

次の質問と回答は、医動物学の必要性和学生の現在の学習状況に関するものである。(図1)

質問1:「医動物学は検査技師にとって必要か?」という質問は、医動物学を学ぶ「動機づけ」ができたかどうかという最も重要なものである。この間に対して学生が必要と認めないようであれば私たちの試みは失敗である。学ぶ意味や必要性を見出せないところに学習意欲は湧かないからである。アンケートでは、学生の

86%が「必要」と答えていた。そのうち「非常に必要」としているものが34%を占めていた。学ぶ価値がある教科だ、意味のある時間だと約90%の学生が思ったことは、この企画は総合的に見て成功したと考えている。「必要ない」と答えたものは1人もいなかった。

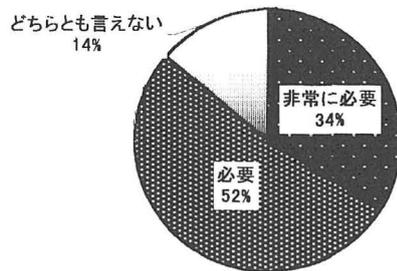
質問2:「入学前に寄生虫について知っていたか?」という質問に対して「知らなかった」と答えたものが72%を占めた。日本は、日頃寄生虫を見かけることのない極めて清潔な国であることを改めて認識した。現代の若者は本当に寄生虫を知らないのである。「知らなかった」と答えたものは、聞いたことはあるがどういふものなのかが分からないか、「全く知らない」と答えたものは寄生虫という言葉すら知らなかったと考えられる。今回のアンケート調査に協力した学生は、小・中学校時代に学童検診で蟻虫検査と糞便寄生虫検査を受けており、アンケートの結果は学校での教育や啓蒙が十分に行われていないことを示している。もっとも、年1回の体験では、特別に教育しない限り、または陽性と判定され、通院、投薬でもされない限り、身近に感じることは難しいのかもしれない。

質問3:「医動物学に興味を持ったか?」の質問に対して「興味を持てた」74%(非常に興味深くなった26%、興味を持てた48%)、「どちらとも言えない」21%、「興味を持てなかった」5%、「全く興味を持てなかった」0%であった。「医動物学は検査技師にとって必要か」というアンケートでは、学生の86%が必要と答えていたが、医動物学への興味度にやや減少が見られたこと

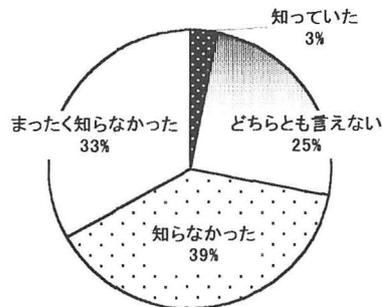
表5 授業評価アンケート I

医動物学授業評価アンケート I		学籍番号	氏名
この授業評価アンケートは、よりよい授業を行うための重要な資料とします。この結果は各人の成績評価に際して、一切不利益にはなりません。素直な気持ちで記入し、協力してください。			
質問 1	医動物学は検査技師にとって必要か	非常に必要	1.2.3.4.5 全く不要
質問 2	入学前に寄生虫について知っていたか	良く知っていた	1.2.3.4.5 全く知らなかった
質問 3	医動物学に興味を持ったか	非常に興味深くなった	1.2.3.4.5 全く興味を持てなかった
質問 4	ビデオ視聴は役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった
質問 5	熱帯アフリカの話は役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった
質問 6	実物寄生虫標本の供覧は役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった
質問 7	寄生虫関連図書は役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった
質問 8	シンポジウムの抄録作りは役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった
質問 9	シンポジウムの発表は役立ったか	非常に役立った	1.2.3.4.5 全く役立たなかった

質問1 医動物学は検査技師にとって必要か？



質問2 入学前に寄生虫について知っていたか？



質問3 医動物学に興味を持ったか？

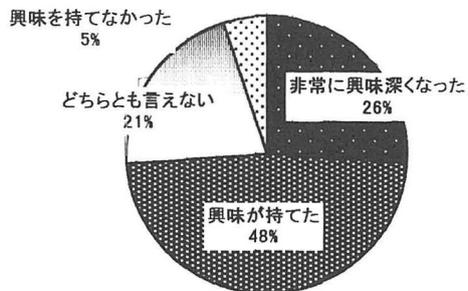


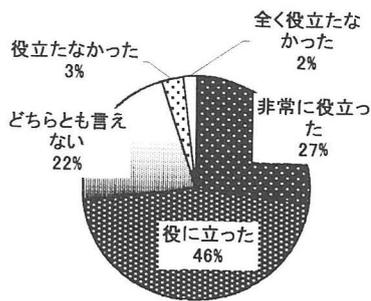
図1 医動物学の必要性と学習状況

は、必要と思うが興味は今一つ、あるいは好き嫌いを判断するところまで勉強していないので何とも言えないということであろう。興味を持てなかったと答えた3人は、シンポジウム形式の授業は非常に良かったとしているものの教員による講義がないことへの不安があったようである。今までの受身型の授業形式に慣れすぎたため、今回の方法に馴染めなかったのではないだろうか。教員の行う授業は試験のポイントを得るためのものとしての存在は大きいのだろう。また寄生虫というあまりイメージの良くないものを連想させる医動物学を、教科として好きになれなかったことも考えられる。総合的に見て70%以上の学生が興味を示したことはまずまずの評価を得たものと考えている。

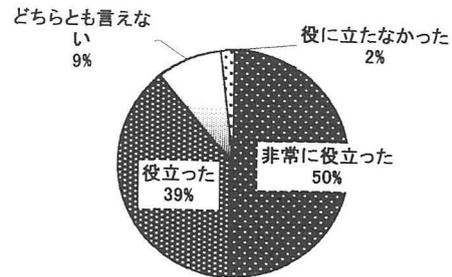
次の質問と回答は医動物学に興味を持たせるための企画に関するものである。(図2)

質問4:「ビデオ視聴は役立ったか?」は、日本において寄生虫感染症をどのように身近に感じたかを問うものである。アンケートでは、「役立った」が73%、「どちらとも言えない」が22%、「役立たなかった」が5%であった。ビデオは南米の住血吸虫症に関するもので、生活史や感染状況、臨床症状と現地の社会状況をおりまぜたドキュメンタリーである。現在日本では遭遇することの少ない寄生虫感染症であるが、同じ地球に存在する疾患として世界的視野で考えることの重要性を教えている。学生からはビデオが海外のものであったこと、古いことなどから、現実味がなかったという意見があったことは、日本人は熱帯地域の多くの感染症から隔絶された社会に住み、世界の実状を感じるこ

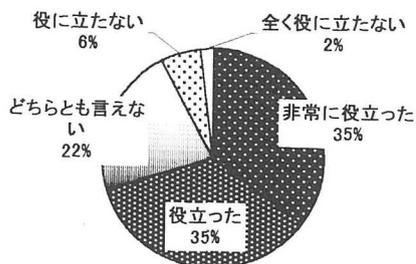
質問4 ビデオ視聴は役立ったか？



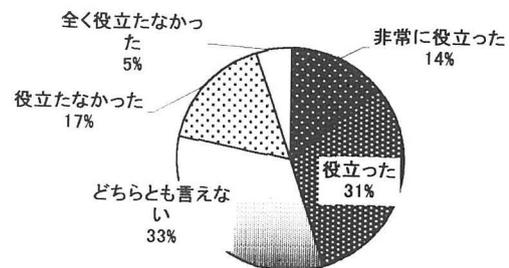
質問5 熱帯アフリカの話は役立ったか？



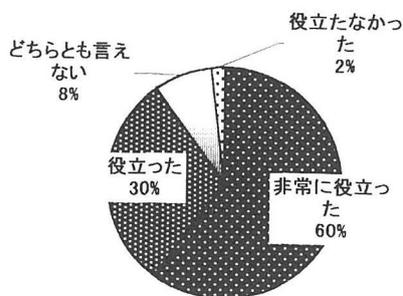
質問6 寄生虫標本の供覧は役立ったか？



質問7 寄生虫関連書籍は役立ったか？



質問8 シンポジウムの抄録作りは役立ったか？



質問9 シンポジウムの発表は役立つと思うか？

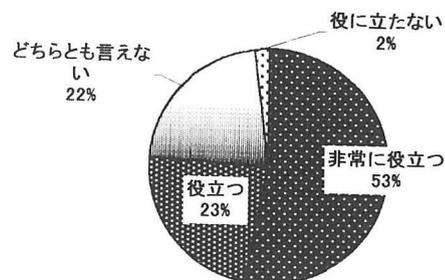


図2 学習の動機づけに関する学生の反応

のできない現実を表している。一方で初めて世界の状況を知って驚いたという意見や、日本人で良かったという感想もあった。ビデオの内容はかなり印象深かったようである。今後はビデオの内容について解説を事前に行うとともに、学生が自由に視聴できるように開放することも考えている。

質問5：「熱帯アフリカの話は役立ったか？」は、中央アフリカ共和国で寄生虫感染症の医療調査を長年にわたり行い、寄生虫と人間が共存せざるえない現状を現地の地理や気候、生活環境などを交えた講演に対する質問である。89%の学生が「役に立った」とし「役に立たなかった」と答えたものは1人（2%）であった。短時間であっても実体験に基づく講演とスライドは学生の興味をかきたて、世界の現状を知るきっかけとなっ

たようだ。教師は何事に限らず実体験し、自らの言葉で学生に熱っぽく語りかけることの大切さを痛感した。質問6：「寄生虫標本の供覧は役立ったか？」は、実際の寄生虫を観察する事により充実した時間を持つのではと考え標本を展示したことに対する質問である。「役に立った」70%、「どちらとも言えない」22%、「役に立たなかった」8%という結果であった。最も学生が興味を示した標本は広節裂頭条虫、有鉤条虫、無鉤条虫などの成虫で体長十メートルにも及ぶ大きい虫が体内に寄生する事に驚いていた。今回は標本の供覧時期を誤ったようである。それは標本の供覧時間とシンポジウムの抄録作製時間が重なったため熱心に見入ることができなかったからである。供覧の時期の調整や意義の説明などを改善するとともに実習時間を固定する

のではなく、学生が必要に応じて自主的に実習体験できるような試みも考えている。

質問7：「寄生虫関連書籍は役立ったか？」は、著者らが約20年に渡って収集してきた書籍を展示、貸出したことに対する質問である。本来は図書館を活用した方が色々な面で便利であるが、今回は試験的に私物貸出を行った。「役立った」45%、「どちらとも言えない」33%、「役立たなかった」22%となり、アンケートの中で最もばらついた結果となった。貸し出し図書館の総数は34冊で一般向け単行本である。貸し出した延べ人数は48人、1人当たり0.6冊、最も多く借りた人は8冊、多く借し出された本は「恋する寄生虫：講談社」「サナダから愛をこめて：現代書林」「はじめてのアフリカ：下田健治」などであった。今後は図書館の種類を絞り込むとともに医学雑誌や教科書類を貸し出し図書館に加え、シンポジウムの抄録やレポート作製に役立つようにしたい。同時に関連図書館を図書館に購入し、幅広く厚みのある学習ができる環境づくりをすすめたいと考えている。また課題図書として数冊の読破を義務づけることは、偏った読書傾向があるとされる学生たちにとって新しい分野の面白さを気づかせる事ができるかもしれない。

質問8：「シンポジウムの抄録作りは役立ったか？」という質問に対し90%の学生が「役立った」としており、そのうち「非常に役立った」としたのが半数以上の60%を占めていた。「どちらとも言えない」が8%、「役立たなかった」が2%、「全く役立たなかった」は0%であった。どのような点で役立ったのかをみると、自分たちで調べてまとめるという経験が充実感につながったという意見が最も多く、普段の講義よりも積極的に取り組めたというものであった。自らの手で作り上げる事を喜びとしているのであろう。

質問9：「シンポジウムでの発表の経験は役立つと思うか？」という質問に対し76%の学生が「役立つ」とし、そのうち53%が「非常に役立つ」と回答している。「どちらとも言えない」が22%、「役立たない」2%、「全く役立たない」0%であった。シンポジウムの発表は抄録作製と関連したもので能動的学習の最たるものである。抄録作製と発表に明るく楽しく取り組めるようであればこの具体的な試みは成功したも同然である。「役立つ」という理由は、初めて人前で発表するため課題に一生懸命取り組めたこと、発表が思った以上に充実していて感動したなどであった。学生は医動物学の必要性を高く評価し、興味が深まったとしているこ

とからも自らが主人公になることは、間違いなく学習意欲をさらに沸き立たせたようにある。「役立たない」という理由は、シンポジウムそのものを否定しているのではなく、このような方法が他の教科でなされたことが少ないことから実際役に立つのかという思いからのようであった。シンポジウムに対する意見で私たちが気にしていたことの指摘があった。それは自分たちがまとめた課題しか十分な理解ができなかったということである。著者らは学生がテーマ全体を勉強するようにシンポジウムの7日前に抄録を配付し、質問事項を提出させたが各課題を学習するのに十分ではなかったようである。なかには抄録が多すぎて読み切れない、試験のポイントがわからないなどの意見もあった。

今回の自己学習を軸とした教育方法は、従来の講義を行わないため教員はかなり楽ができるのではと考えていた。しかし教科書やインターネット、図書館等で自ら学び、知識や疑問を見出した学生の相談に乗り、学生の成長を見守る余裕は、教員側の幅広く深い知識と能力が必要とされることを痛感した。学生が意欲的になる事は、教員にも刺激になり、教える側にとってマンネリ化した講義（教育）から脱却するきっかけになるものと確信した。次回の試みとして基本的にはシンポジウム形式の学習方法を継続するものの、テーマは学生自らが見つけるということを試みたいと考えている。評価を学生が行うことには異論もあろうが、遅かれ早かれ自らが自らの評価を下しつつ生涯学習に努めざるを得ない時期が来るのである。その評価は学生自身が身を持って享受しない限り本当の意味での生きた、あるいは活かせる評価にはならないと信じるからである。寄生虫シンポジウムでは視聴覚教材（スライド、液晶プロジェクター、ポスター、OHPなど）を使用してプレゼンテーションの効果をあげ、表現の充実を図り、うまく教えること、講義することが自らの理解に繋がることを実感させたい。最終的には寄生虫シンポジウムを学生による自主運営とすることで学生をより能動的な場へと駆り立てたいと思っている。さらに一歩進めて企画から評価まで学生自らが行うようになれば真の意味での学生参加型教育といえるのではないかと考えている。

この教育方法は、学生のやる気を引き出すため興味を引くような方法論を考え、そのような授業を目指したつもりである。「わからなければ学ばない、学びたくない」、「興味が湧かなければ学ばない、学びたくない」

という学生に対して懸命に対処方法を模索する自分の姿が見える。このことは、学生に迎合し、依存心を育てるだけではないかという思いがふと浮かぶ。教員は教育技法を習得し、解りやすい教育を目指すべきなのだろうが、学ぶ側（学生）にもより良く学ぶための技術を導入しなければならないのではないか。

大学全入時代が到来する。それは2009年ぐらいからと見込まれている。大学淘汰の時代が否応無しにやって来るのである。このような時代に存在する大学は、しっかりした教育理念に基づいて良い教育を学生に提供しているに違いない。なぜならばそれぞれの大学の教育理念に基づく教育が、学生が大学を選ぶ基本的な基準となるからである。入学を許可した学生の質の低下を嘆き、高等学校以下の教育を批判しても何の進展も見出せない。大学への進学率は上昇し、大学大衆化が進んでいるのである。大学は教育理念を忘れることなく大学の授業自体も大衆化に 대응べく変わらざるを得ない。そして学生の実態に即した授業の構築を試行錯誤しなければならない。

受身の学生をどう変えるか。やる気のない人間をどう動かすか。大学生に自ら考える力を植え付けるためには、画一的な授業を変えていかなければならない。教室で講義を受ける場合、予習をまったくしないか、ほとんどしていない状態の学生にとって、はじめて聞く事柄が理解できるわけがない。予習を要求するか、講義を聴き、理解する受皿を事前にどう作るか。また質問がない、少ない、疑問に対する論理的思考がなされないなどが問題提起されている。しかしそれでも社会は問題検出能力と問題解決能力を持つ人材の輩出を期待しているのである。

勉強する時の大事な要素は何といっても動機である。動機がなければ勉強する気になれないし、持続力も失せてしまう。教師の役割の第一は、学生にその科目を勉強しようとする動機づけができるかどうかである。この動機づけの良し悪しはその後の教育効果に大きく影響する。動機づけの後には、どのようにして興味を持たせるかである。人間はそれぞれ様々な背景と考えを持っているので、単一な方法ではなく多方面からの提示が求められる。そのなかの1つにでも興味を示すようであれば自ら進んで学ぶきっかけとなるのである。教師は目指す職業がいかにやりがいのあるものであるかを自分の言葉で語るができなくてはならない。

学生による授業評価が単行本や新聞紙上で話題になっている。その1つの例として大阪大学が10学部すべ

ての授業を対象とした学生による評価制度を平成12年度から導入することを決めた（読売新聞 平成12年3月24日）。それは前・後期末の年2回、アンケート用紙を配布、無記名で解答を求めるというものである。これが画期的と言われるぐらい受講者である学生をそれほど意識していない教育が旧態依然として存在していたことを示すものである。もっともこれからは好むと好まざるに係わらず顧客である学生の意見を聞かないでニーズの高い授業ができるわけがない。学生に授業評価できる力があるのかという疑問を持ち、それが授業評価をしない理由に多少ともなっているようであればまずやってみることである。授業は教師一人のものではなく、受講する学生のものであるという認識が必要である。聴衆にとって聞く価値のないものなど存在しつづけたためしはないのである。しかしながら授業評価を個々の教員が行い、自分の授業改善にだけ繋がるようなことをしてもその教科の教員の評判は良くなるかもしれないがそれ以上のメリットは見出せないであろう。授業評価は組織として制度化され実行されなければ、大学全体の授業改善にはつながらない。授業を変えなければ大学は変わらないのである。しかし現在の組織構造を変えることは極めて難しいであろう。それをなした組織はこれからも価値あるものとして存続するのである。今後の課題は、授業改善を大学としていかに組織化、制度化するかである。

国家試験や就職に良い結果を出すことは大学にとって重要な事の1つであるが、同時に生き生きとして、活力溢れる学生を世に出していくことも忘れてはならない。

4. ま と め

シンポジウム形式の学習法を導入したところ学生は積極的に受け入れている事が分かった。まず医動物学に興味をもたせることができるかどうか教育のポイントと考え授業をはじめた。著者らが行った興味を持たせるための企画は「ビデオ視聴」、「海外の現状を知る熱帯アフリカの講義」、「医動物学標本の供覧」、「医動物学関連書籍の紹介・貸出」、「寄生虫シンポジウムの開催」などである。それぞれの試みに対する学生の反応は良好で、動機づけとしては成功したと考えている。入学前には寄生虫というものを知らなかった学生は72%であった。私たちが最も注目したことは、日本ではほとんど遭遇することのない寄生虫感染症に学生がどの程度興味を持つかであった。授業終了後には、

医動物学の必要性を86%の学生が感じ、また74%の人がこの学問に興味を持ったという結果を得た。ビデオによる寄生虫感染症の紹介では、かなりの印象を与える事に成功し、視覚による効果を痛感した。アフリカ現地での活動状況のスライドを交えた講演では、ビデオと違った印象を得たようであった。それと同じく実際に寄生虫そのものを観察することが寄生虫に興味を持つ大きな動機づけとなったようである。寄生虫学入門という意味もこめて関連書籍の読書を薦めたところ多くの学生が興味を示した。

シンポジウムの基本となる抄録作製では学生自身が積極的に取り組み、充実感を持ったようである。人間の学習行動は、いかに能動的であるかが最も大切な事である。シンポジウムに参加し、発表するという経験は、将来有意義な事を経験しているということが動機づけのひとつになったものと思われる。これからの大

学教育を考えると、学生の学ぶことに対する興味や好奇心をいかに引き出すか、そして、どのような方向性を示すかが、教員に課せられた古くて新しいテーマであると考えている。したがって、教育の試みは直接、教員の教育姿勢を問われることとなるであろう。

参考図書

- 1) 和田秀樹：大人のための勉強法，東京：PHP新書，pp. 14—108，2000.
- 2) 稲垣佳世子，波多野誼余夫：人はいかに学ぶか，日常的認知の世界，東京：中公新書，pp. 45—64，1995.
- 3) 安岡高志，滝本 喬，三田誠広，香取草之助，生駒俊明：授業を変えれば大学は変わる，東京：プレジデント社，pp. 29—64，1999.
- 4) 喜多村和之，馬越 徹，東 曜子編訳：大学教授法入門，東京：玉川大学出版部，pp. 80—123，1982.